
その涙がとまるまで

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その涙がとまるまで

【Nコード】

N9127F

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

満月の夜、ひとり暮らしの僕の許に年下の幼なじみが泣きながら駆けこんできて……。すべてのがんばる女の子に贈る、『お兄ちゃん』の優しいエール。

月が欲しいときみは泣く。

手が届くはずなんてないけれど、嘲笑^{わら}ったりなんてしないから。

間の抜けたインターホンの音に目が覚めた。

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。視界はぼんやりと薄暗く、月影の射す窓辺だけが妙に明るかった。

寝起きの気だるさを引きずりながら、ベッドから起き上がる。何げなく視線をやると、カーテンを引いていない窓の向こうに、白々と硬質な光を放つ満月が浮かんでいた。

まぶしいわけではないのに、瞼の裏に残像が残るような鮮烈な輝き。地球を覆う夜空にぽっかりと空いた穴から、遠い銀河の心臓で白熱する光がこぼれ落ちてくるような。

もう一度インターホンが鳴った。

僕は引き寄せられるように玄関を振り返った。こみ上げてきたあくびを洩らしながら、ドアのチェーンを外す。

「はいはい、どちら様あ？」

重い金属製のドアを開けた瞬間、どんっと胸に鈍い衝撃を食らった。眠気が一気に四散する。

「……みずき？」

視線を下ろすと、指通りのよさそうな髪に覆われた後頭部と、見慣れたセーラー服の白い襟が見えた。

ぎゅうつと胸にしがみついてくる年下の幼なじみ。僕は目を瞬かせた。

「どうしたんだよ、いきなり」

みずきは答えない。シャツを掴む指先に力をこめ、ますます強く

頭を押しつけてくるだけ。

思わずため息が洩れた。

とりあえず、開けっ放しのドアを閉める。外から射しこんでくる薄い光が遮断され、視界の暗さが一瞬濃さを増した。

ずるりとみずきが崩れ落ちた。僕も引つ張られるまま、彼女を抱える形で尻餅をつく。

「おい、みずき」

立ち上がるように促すが、みずきは石化してしまったかのごとく微動だしない。上がる気配のない顔に、もう一度ため息がこみ上げてきた。

「なんなんだよ、いつたい……」

何かがあったということとはわかる。だが具体的にどんなことが起こったかまではわからない。いくら彼女が母親のお腹の中にいた頃からのつき合いとはいえ、言葉を介さずに相手のすべてを察することとは不可能だ。

とにかく、僕のところへ駆けこまずにはいられないような、何か。

「……もしかして、告白ったのか？」

ふと思いついたことを訊いてみる。

セーラーカラーに覆われた肩が、小さく震えた。

……ビンゴか。

結果は——聞かなくても充分予想できた。

「駄目だったのか？」

ほとんど確認のように問いかけると、微かな頷きが返ってきた。

「……後輩にしか見れないって」

くぐもった声はか細く、風に揺れる蠟燭の炎のように今にも消えてしまいそうだった。僕はみずきの背中に腕を回すと、ぽんぽんと軽く叩いた。

「そっか」

好きな人ができた、と恥ずかしそうな、けれどとても嬉しそうな笑顔で報告されたのは、いったいいつだっただろう。

控えめというか消極的というか、内気で他人^{ひと}よりも一步退いてしまいがちな妹分が、はじめて自分から前に踏み出した恋。ちよつとばかりさびしさを覚えながらも、僕なりに精いっぱい応援してきたつもりだ。

——それでも、「ああ、やっぱり」とどこかで呟く声があった。はつきりとした確証があったわけではない。ぼんやりとした、予感のようなものを感じていただけだ。

物事は当事者よりも第三者のほうがよく見えていることがある。僕も蚊帳の外にいたからこそわかったのかもしれない。

けれど、僕はそれをみずきに伝えなかった。根拠のない曖昧な忠告をして、みずきの輝くような瞳を曇らせたくなかったから。必死に震えを押し殺している勇気をくじけさせたくなかったから。

今の状況を考えれば、それは間違いだったのかもしれないけれど。

「……残念だった、な」

なんと声をかければいいのか。気のきいた言葉なんて何ひとつ浮かんでこない。

確かに恋は叶わなかったかもしれない。想いは報われなかったかもしれない。

それでも。

「——がんばったな」

腕の中で小さく息を呑む音が聞こえた。

僕は少しだけ抱きしめる力を強くしながら、もう一度くり返した。

「がんばったよな、おまえ。ホントに、よくがんばった」

どうか、忘れないでほしい。

自分がんばったということを。不器用でつたない、まぶしいほどひたむきな努力を。

月に手が届くわけがない。けれど、どれだけ一生懸命手を伸ばしたか、僕は知っている。

愚かだったと切り捨てず、誇らしげに胸を張ってほしい。

「……っ」

みずきの声が震える。しがみついてくる力が更に強くなって、そして。

細く細く引き絞るような嗚咽とともに、あたたかな涙がシャツに染みこんできた。

僕はみずきに応えるように、きつくきつく、彼女の体を閉じこめた。

好きなだけ、思いきり泣けばいい。僕が泣かせたようなものなのだから、いくらでも胸を貸してやる。

泣いて泣いて泣きやんで、その涙が止まるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9127f/>

その涙がとまるまで

2010年11月23日04時11分発行